

清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号土留柵改修その他整備工事に伴う事前調査

はじめに

清寧天皇河内坂門原陵飛地い号（以下、「本飛地」という）は、大阪府羽曳野市西浦1丁目に所在する現状主軸長45mの前方後円墳で、大正元年(1922)12月24日に宮内省によって清寧天皇河内坂門原陵（以下、「清寧天皇陵」という）の陪冢として編入された（第32図）。本飛地より府道をはさんで西側には、主軸をほぼ同じくして、清寧天皇陵が存在する。本飛地の遺跡名は、小白髪山古墳である。

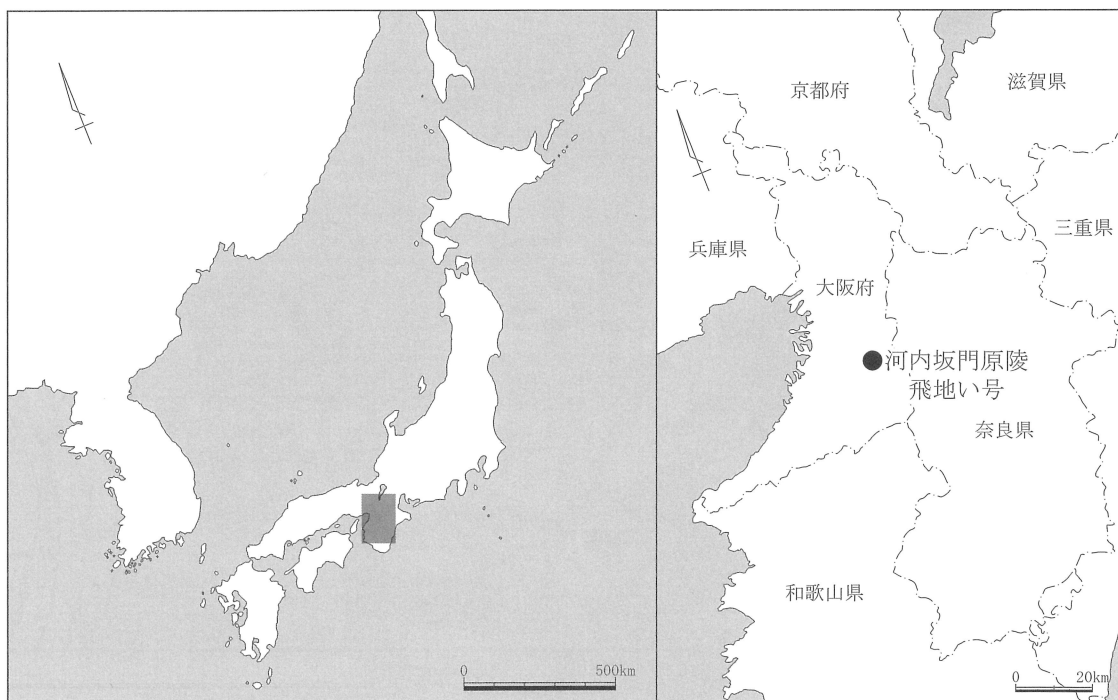
本飛地は、西の清寧天皇陵、北東の白鳥陵と同じ、標高38m前後の中位段丘上に築かれている⁽¹⁾が、現在は周囲を住宅に囲まれ、西側には府道が走っており、現地で地形本来の状況を確認することは困難である（第33図）。現状で、本飛地は平坦地に築かれているように見える。

標記の事前調査は、平成26年度に予定された本飛地北側の土留柵およびフェンスの改修工事に先立って、施工予定地における遺構・遺物の有無を確認し、工法の選択に有意な情報を得ることを目的として、平成25年9月13日から22日までおこなった。ここでは、事前調査の内容について報告する。

1 既往の調査

宮内庁の調査 当庁では、平成11年度と平成12年度に本飛地の調査を実施した。平成11年度の事前調査では、墳丘南側に5箇所トレンチを設け、墳丘盛土のほか、墳丘築造以降の盛土が厚く堆積している状況を確認した。遺物としては、埴輪や須恵器などの他に、埋葬施設に副葬された物の可能性がある空玉と耳環が出土した⁽²⁾。平成12年度の立会調査では、後円部南側の工事箇所で墳丘盛土の堆積状況を確認した⁽³⁾。

羽曳野市教育委員会の調査 当庁の境界外では、平成5、9、10、12年度に羽曳野市教育委員会が本飛地に関する調査を実施した。平成5年度の調査では、墳丘北側で落ち込みを検出し、外堤と周濠部分と推定した。また、周濠の深さを1m以上、周濠の幅を約12mと復元した⁽⁴⁾。平成9年度の調査では、後円部とくびれ部の付近で北側への落ち込みを検出し、それを墳丘裾もしくは周濠の墳丘肩の部分と推定した。また、くびれ部付近では、底部から口縁部まで残る円筒埴輪を検出した⁽⁵⁾。平成10年度の調査では、前方部



第32図 河内坂門原陵飛地い号 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

付近で北側への落ち込みを検出し、墳丘裾部分と推定した⁽⁶⁾。平成12年度の調査では、墳丘南側で落ち込みを検出し、外堤と周濠部分と推定した。その落ち込みの形状より、後円部から前方部へ広がる形状の周濠を想定した。また、大正15年測量の陵墓地形図と調査区を重ねて、調査区の落ち込みと陵墓地形図の畦畔が一致することを指摘した⁽⁷⁾。

2 トレンチの設定と基本的な層序

調査は施工予定地周辺に4箇所のトレンチを設けて実施した(第35図)。第1トレンチは前方部北西隅、第2トレンチはくびれ部、第3トレンチは後円部北側、第4トレンチは後円部東側にそれぞれ設けた。

第1トレンチから第4トレンチにおける基本層序は、表土(I)、近世以降の盛土(II)、流土(III)、墳丘盛土(IV)、地山(V)の順である。II層について、「近世以降の」としたのは、第2トレンチにおいて、近世の磁器碗底部片が出土したことによる。出土遺物のほとんどは、II層より出土したもので、それらの多くは調整などの特徴から本来本飛地にあったものと考えられる。ゆえに、II層は新しい時期の盛土であるが、遠くからではなく本飛地周囲より盛り上げたものと考えて大過ないと思われる。

3 調査の結果

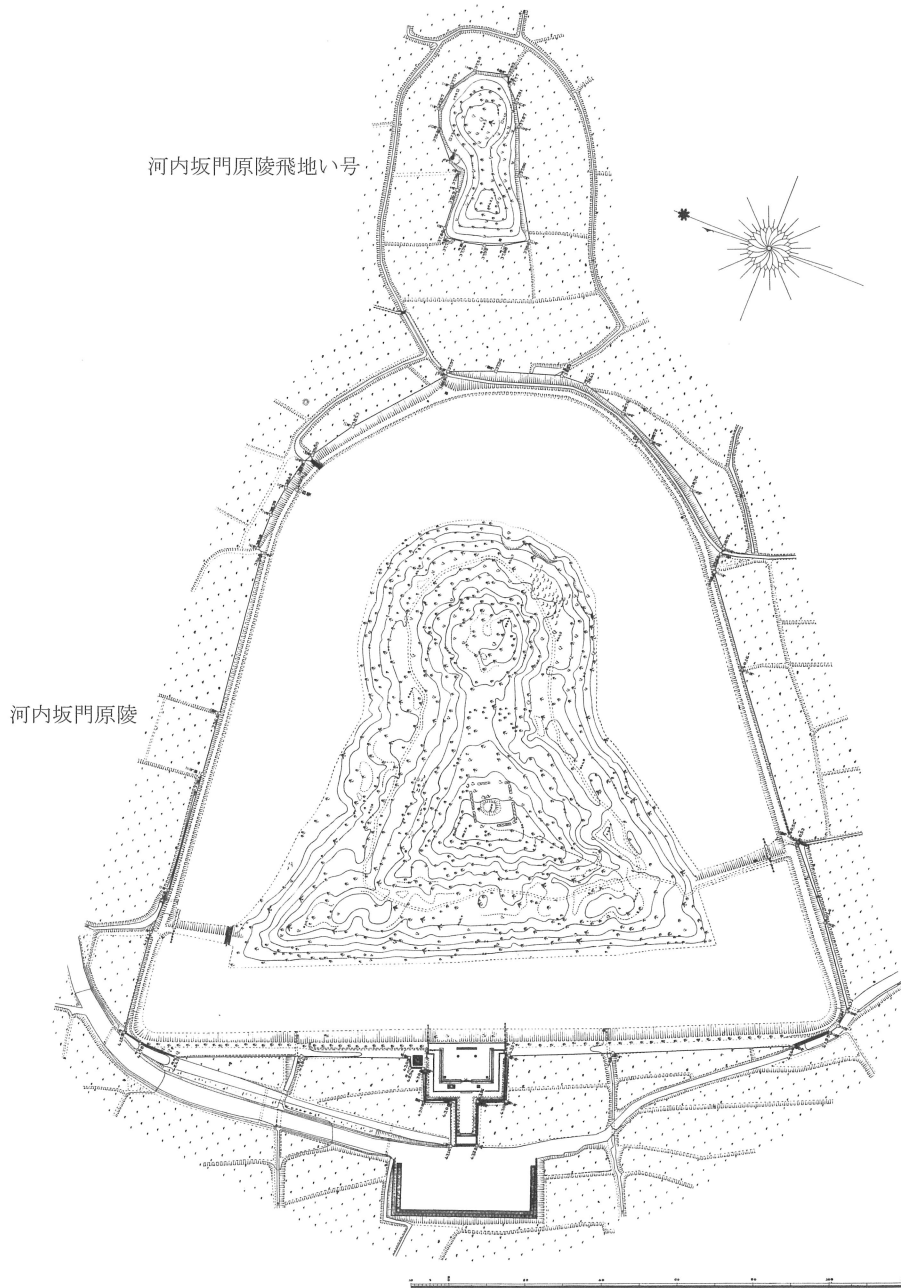
第1トレンチ(第36図、図版17) 前方部の北西隅付近に設定した2m四方のトレンチである。土層は上から、表土、近世以降の盛土、墳丘盛土、地山が認められた。地山は標高約38.5mで検出した。墳丘本来の形状は残存しておらず、遺構は検出されなかった。墳丘盛土は北西から南東へと緩やかに高くなっていった。遺物は埴輪、土師器、須恵器、陶器、瓦が出土した。



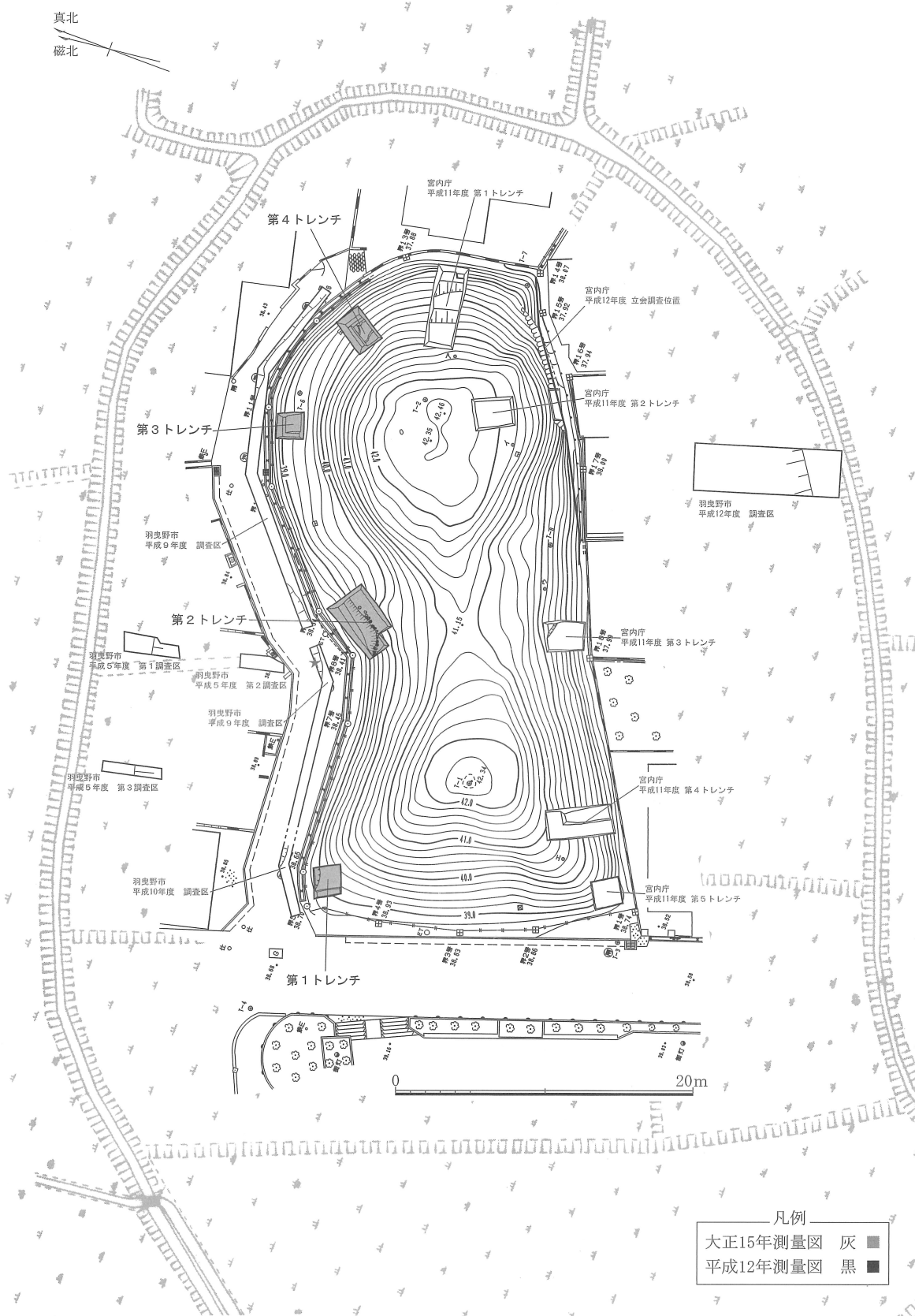
第33図 河内坂門原陵飛地い号 周辺陵墓位置図 (1/20,000)

第2トレンチ（第37、38図、図版18、19） 前方部と後円部の接する北側くびれ部に設定した長さ5 m、幅約3 mの不整形なトレンチである。土層は上から、表土、近世以降の盛土、流土、墳丘盛土、地山が認められた。地山は標高約37.6 mで検出した。

遺構は円筒埴輪列を検出した。埴輪列は、近世以降の盛土による土圧で押されたために、北側に傾いている埴輪や倒れている埴輪もあった。埴輪は底部付近まで近世以降の盛土で埋まっていたことから、埴輪下部を埋めていた墳丘盛土がほぼ流出した状況で、近世以降に盛土がなされたことが判明した。調査で検出はされなかったが、No.1の東方とNo.1とNo.2の間にも本来埴輪が立て並べてあった可能性がある。埴輪列のNo.8で列が大きく屈曲することから、この辺りが前方部と後円部の境と考えられる。埴輪据え付け用の掘形は、調査では確認できなかった。おそらくは墳丘構築過程で盛土上に埴輪を立て並べ、その状態でさらに盛土を



第34図 河内坂門原陵飛地い号 位置図 (1/2,000)



第35図 河内坂門原陵飛地い号 トレンチ配置図 (1/400)

おこない、埴輪下部を埋めたものと考えられる。また、埴輪列にて埴輪内部に落ち込んでいた埴輪片の位置を観察したところ、底部にも破片が見られるものが複数個あったことから、埴輪を並べた当初は、埴輪内部に埋土を入れなかったと考えられる。

円筒埴輪No.1…内側底部より上に0 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.2…内側底部より上に7 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.3…内側底部より上に6 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.4…内側底部より上に3 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.5…内側底部より上に2 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.6…内側底部より上に5 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.7…内側底部より上に2 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.8…内側底部より上に5 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.9…内側底部より上に9 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.10…内側底部より上に0 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.11…内側底部より上に0 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.12…内側底部より上に10 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.13…内側底部より上に10 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.14…内側底部より上に9 cmで埴輪片を検出
円筒埴輪No.15…内側底部より上に5 cmで埴輪片を検出

墳丘平面形は、トレンチ東壁の状況から、現代の攪乱によって墳丘盛土北側が削られていることが明らかで、本来の形状を留めていない。また、墳丘盛土面は北から南へと緩やかに高くなっており、墳丘築造当初の墳丘盛土面がより平坦であったと仮定すると、墳丘立面形も本来の形状とは考えられない。ただし、検出された埴輪列の底部高が38.7 mから38.8 mで、埴輪列下部をある程度埋めてテラス面を整えたと考えれば、墳丘築造当初のテラス面高は約39 mと推測可能である。

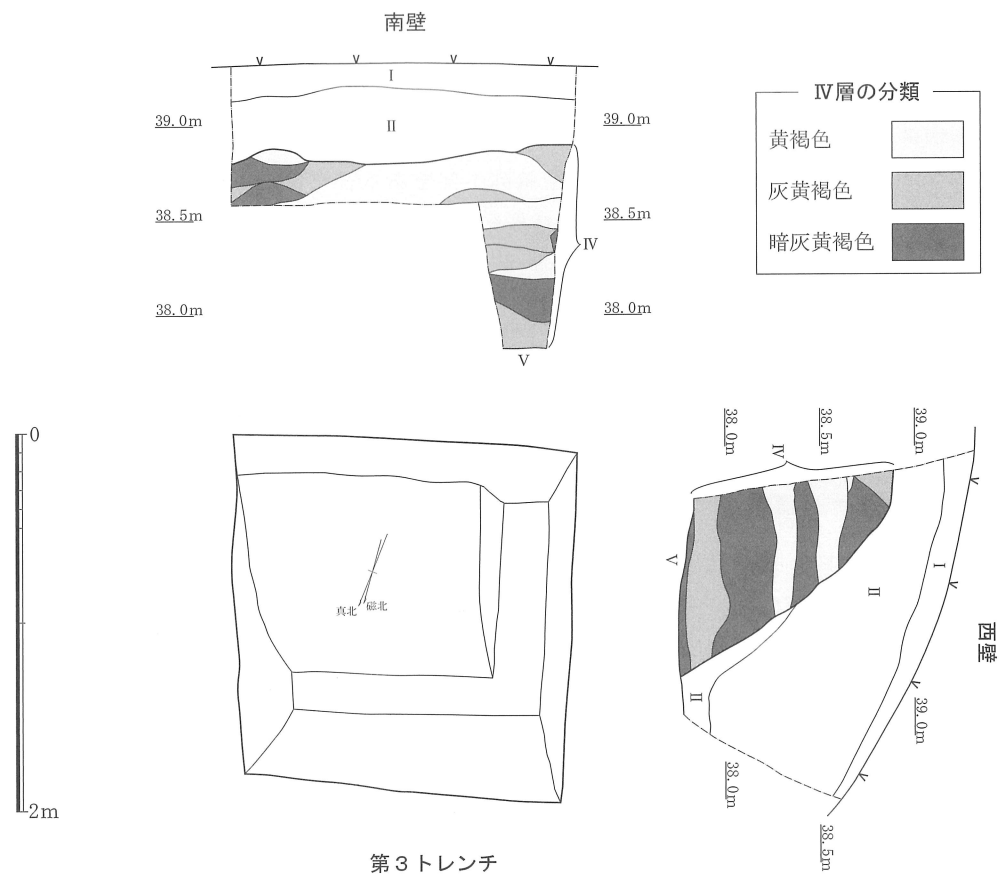
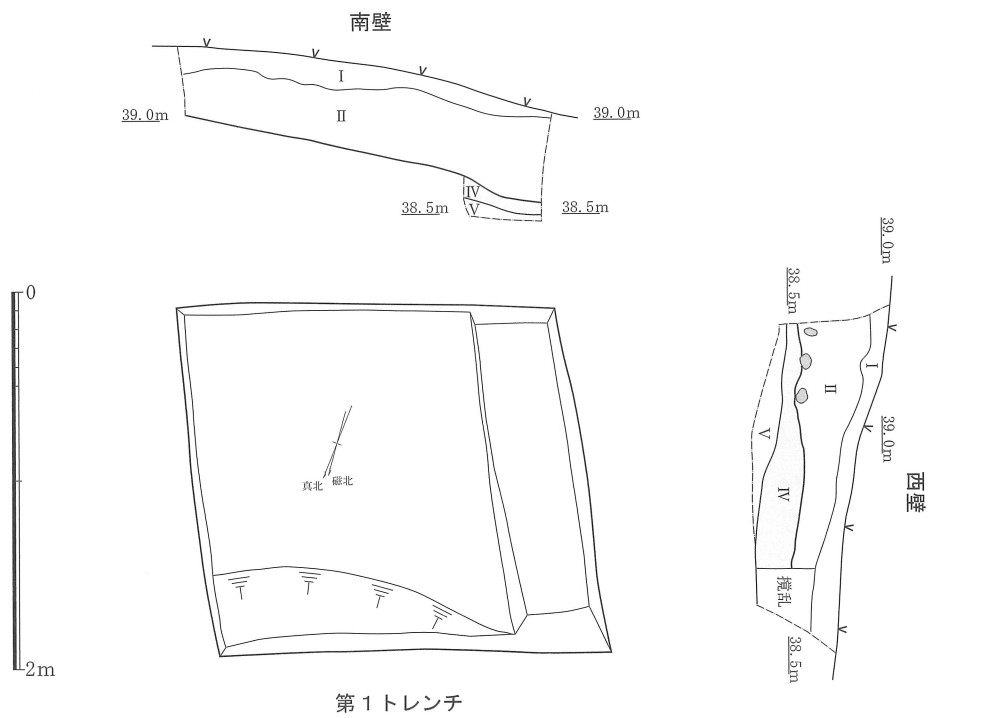
遺物は埴輪、土師器、須恵器、陶器、瓦が出土した。

第3トレンチ（第36図、図版20） 後円部の北側、墳丘主軸と直行する位置に設定した2 m四方のトレンチである。土層は上から、表土、近世以降の盛土、墳丘盛土、地山が認められた。地山は標高約37.8 mで検出した。墳丘本来の形状はほとんど残存しておらず、遺構は検出されなかった。ただし、第2トレンチと同じように墳丘盛土面が38.8 m程で平坦になることから、墳丘築造当初のテラス面高は約39 mの可能性がある。墳丘盛土は10 cmから30 cm程度の厚さで、土質と色調が異なる土を交互に重ねたものである。遺物は埴輪、土師器、須恵器、陶器、瓦が出土した。

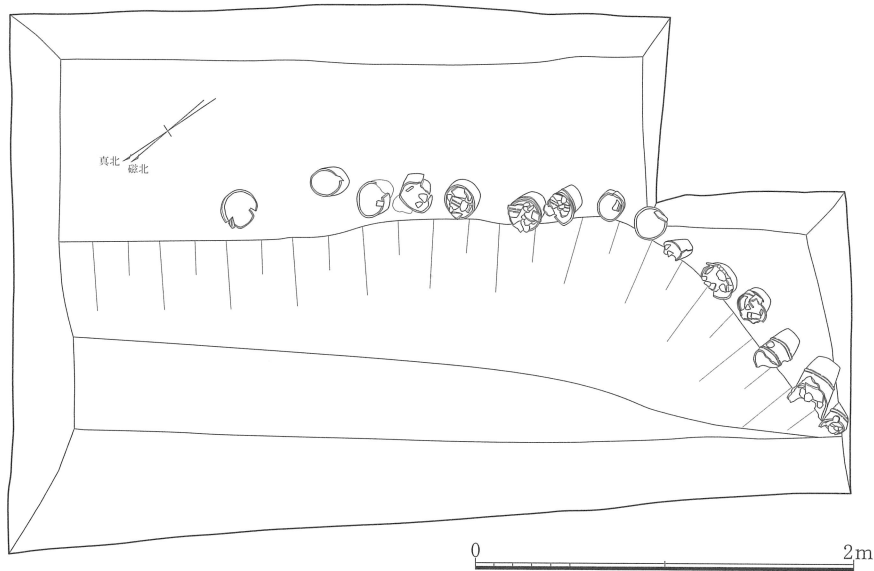
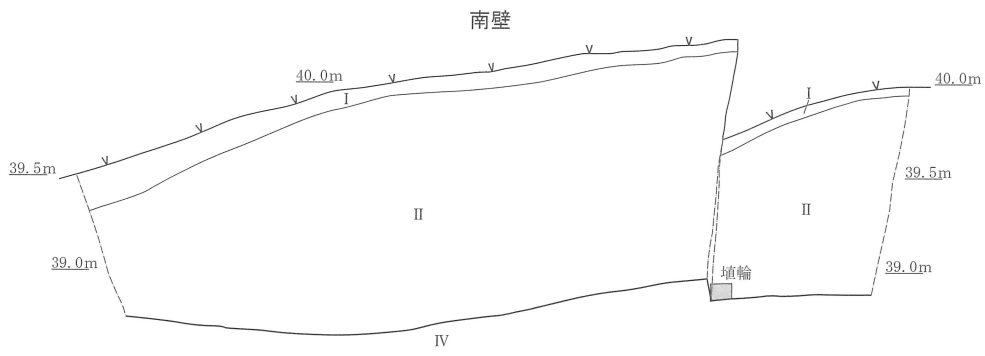
第4トレンチ（第38図、図版21） 後円部の北東に設定した幅2 m、長さ2.7 mのトレンチである。土層は上から、表土、近世以降の盛土、墳丘盛土、地山が認められた。地山は南へ向かって緩やかに上がっており、標高約38 mから38.4 mで検出した。墳丘盛土から地山まで削った跡があり、墳丘本来の形状はほとんど残存しておらず、遺構は検出されなかった。ただし、墳丘盛土面は約39 mで傾斜が緩やかになることから、これが多少なりとも墳丘築造当初の状況を伝えるものの可能性がある。墳丘盛土は10 cmから30 cm程度の厚さで、第3トレンチの状況とは異なり、土質と色調が同様の土をある程度まとめて積んだものである。遺物は埴輪、土師器、須恵器、陶器、瓦が出土した。

4 出土遺物

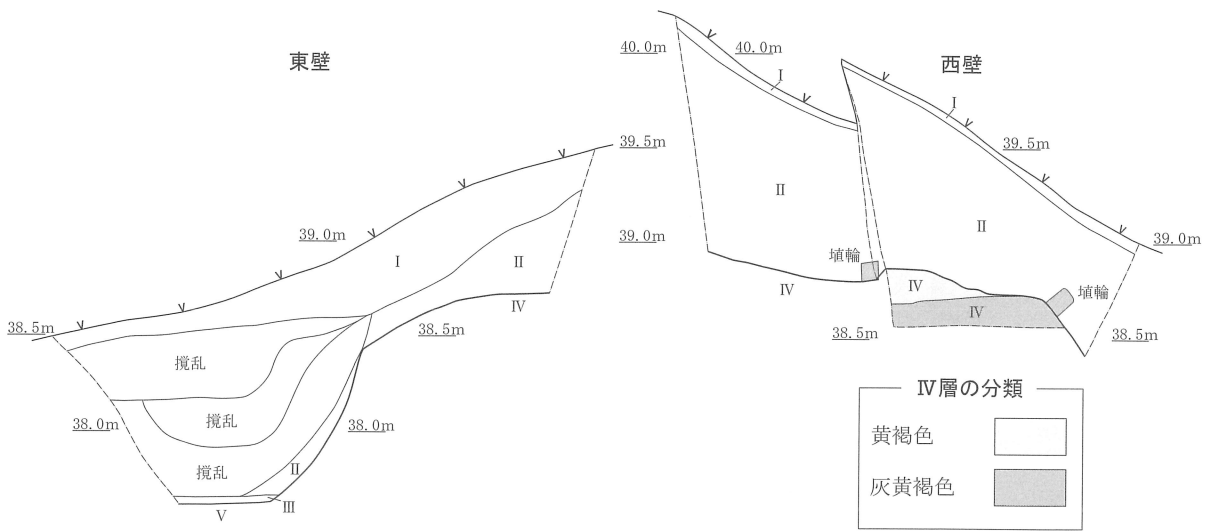
事前調査で出土した遺物は2679点で、コンテナ10箱分である。また、出土遺物の9割以上は埴輪片である。ここでは埴輪、土器、瓦の順にそれらの概要を述べる。円筒埴輪については、底部から口縁部まで残る個体



第36図 河内坂門原陵飛地い号 第1、3トレンチ平面図・断面図 (1/40)



平面図



第37図 河内坂門原陵飛地い号 第2トレンチ平面図・断面図 (1/40)

が無く、朝顔形埴輪との区別が困難なため、ここでは便宜的に一括して円筒埴輪として報告する。確実な朝顔形埴輪は22のみである。円筒埴輪、形象埴輪ともに黒斑が残るものは見られなかった。第2トレンチで出土した埴輪列No.1から15までの15本については、第38図の1から15と番号が対応している。

円筒埴輪（第40図1～第41図22、図版22、23） 1は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高14.8cm、底部径11.7cmで、外面調整にはナデの後タテハケ、内面調整にはナデを施す。突帯断面はいびつな台形で、ハケメの上から貼り付けている。第2段目に円形透孔が残り、色調は褐色で、焼成は良好である。1の内部埋土より出土した口縁部16は、同様の胎土・色調・焼成・ハケメから、1と同一個体の可能性がある。16の口縁端部は、ハケメの上からナデで仕上げている。

2は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高14.8cm、底部径15cmで、外面調整と内面調整にはナデを施す。突帯は低く、不明瞭である。第2段目に円形透孔が残り、色調は褐色で、焼成は良好である。

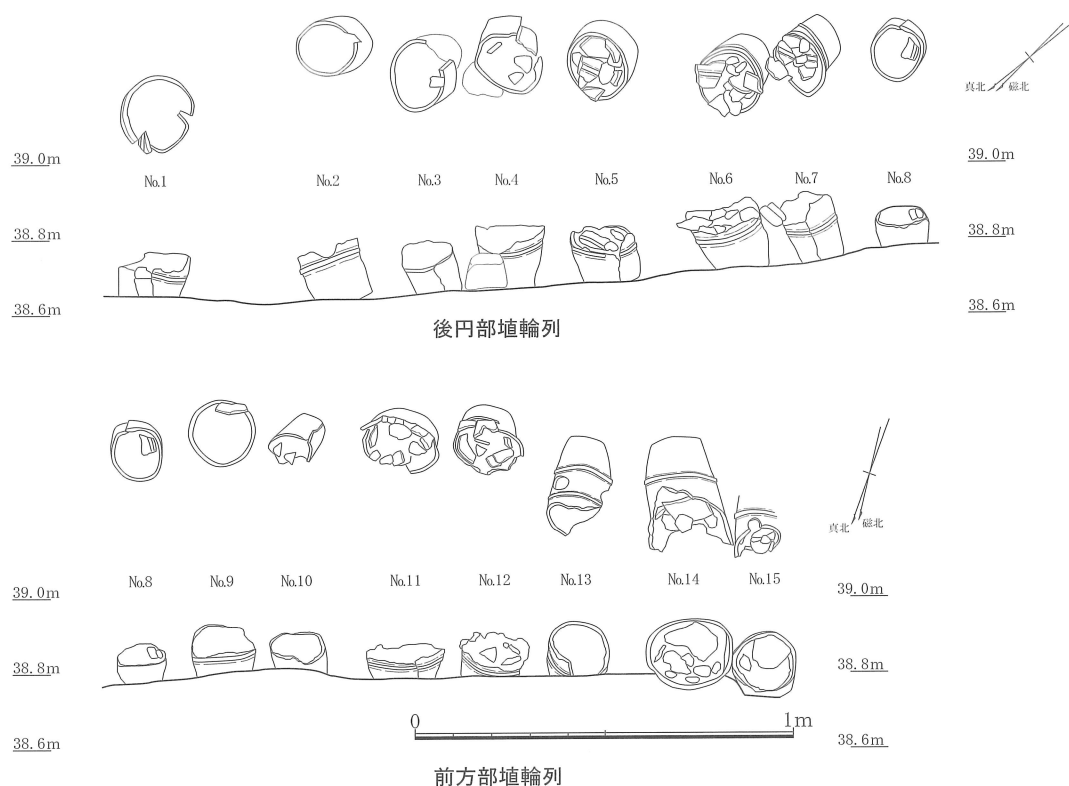
3は、底部より第1段目の途中まで残存し、残存高9.7cm、底部復元径12.4cmで、外面調整と内面調整にはナデを施す。色調は褐色で、焼成は良好である。

4は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高12.7cm、底部径11.1cmで、外面調整には板状工具によるナデ、内面調整にはナデを施す。突帯は低く、不明瞭である。第2段目に円形透孔が残り、色調は黄褐色で、焼成は不良である。

5は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高12.5cm、底部復元径14.9cmで、外面調整にはタテハケ、内面調整にはナデを施す。突帯断面はいびつな台形で、ハケメの上から貼り付けている。第2段目に円形透孔が残り、色調は褐色で、焼成はやや不良である。

6は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高14.4cm、底部径16.7cmで、外面調整と内面調整にはナデを施す。突帯は不整形である。第2段目に円形透孔が残り、色調は黄褐色で、焼成はやや不良である。

7は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高17.6cm、底部径13.7cmで、外面調整は磨滅のため不明、内面調整にはナデを施す。突帯は低く、不明瞭である。第2段目に円形透孔が残り、色調は褐色で、焼成は



第38図 河内坂門原陵飛地い号 第2トレンチ埴輪列平面図・立面図 (1/20)

やや不良である。

8は、底部より第1段目の途中まで残存し、残存高8.7cm、底部復元径11.3cmで、外面調整と内面調整は磨滅のため不明である。色調は褐色で、焼成は不良である。

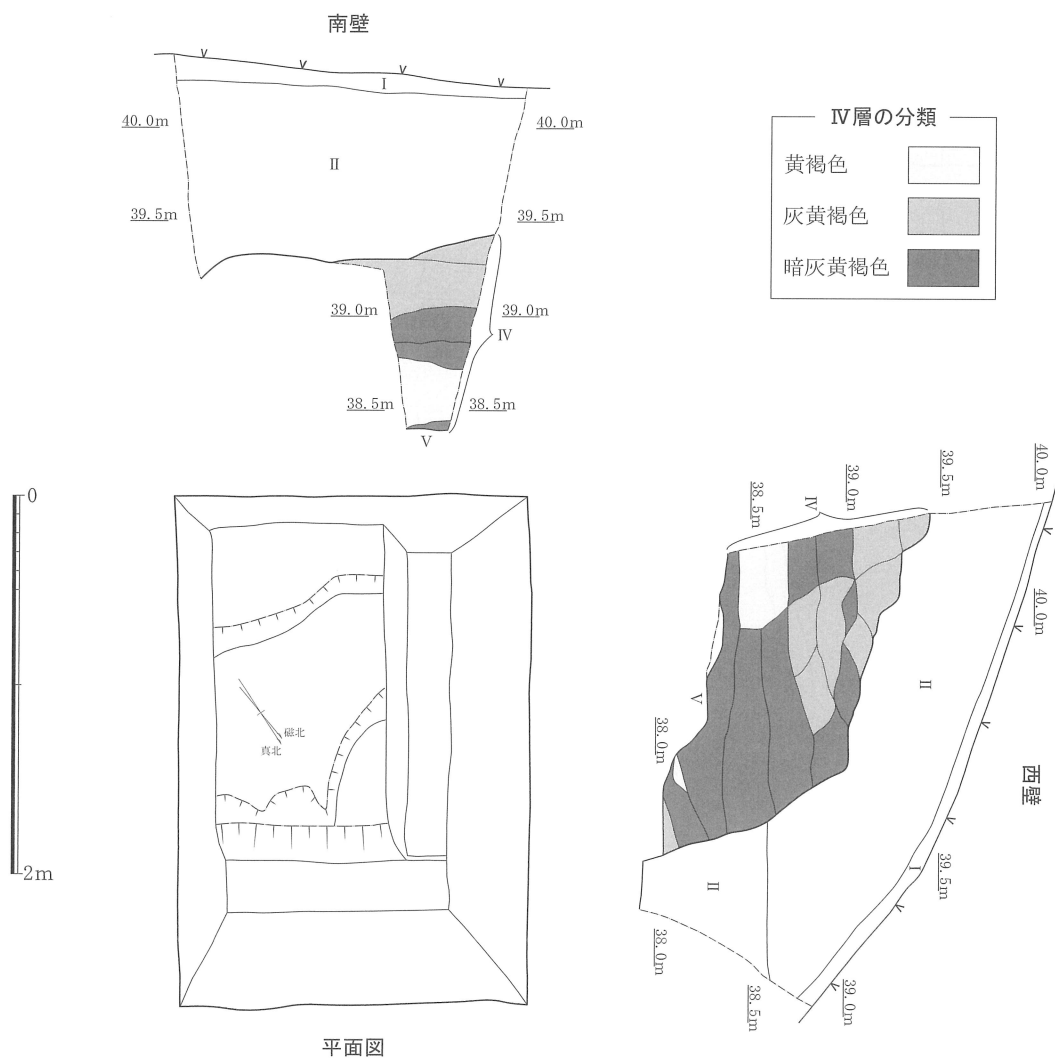
9は、底部より第3段目の途中まで残存し、残存高17.3cm、底部径14.1cmで、外面調整と内面調整にはナデを施す。突帯断面はいびつな台形である。第2段目に円形透孔が残り、色調は褐色で、焼成は良好である。

10は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高13.9cm、底部径9.3cmで、外面調整と内面調整にはナデを施す。突帯は低く、不明瞭である。色調は褐色で、焼成はやや不良である。

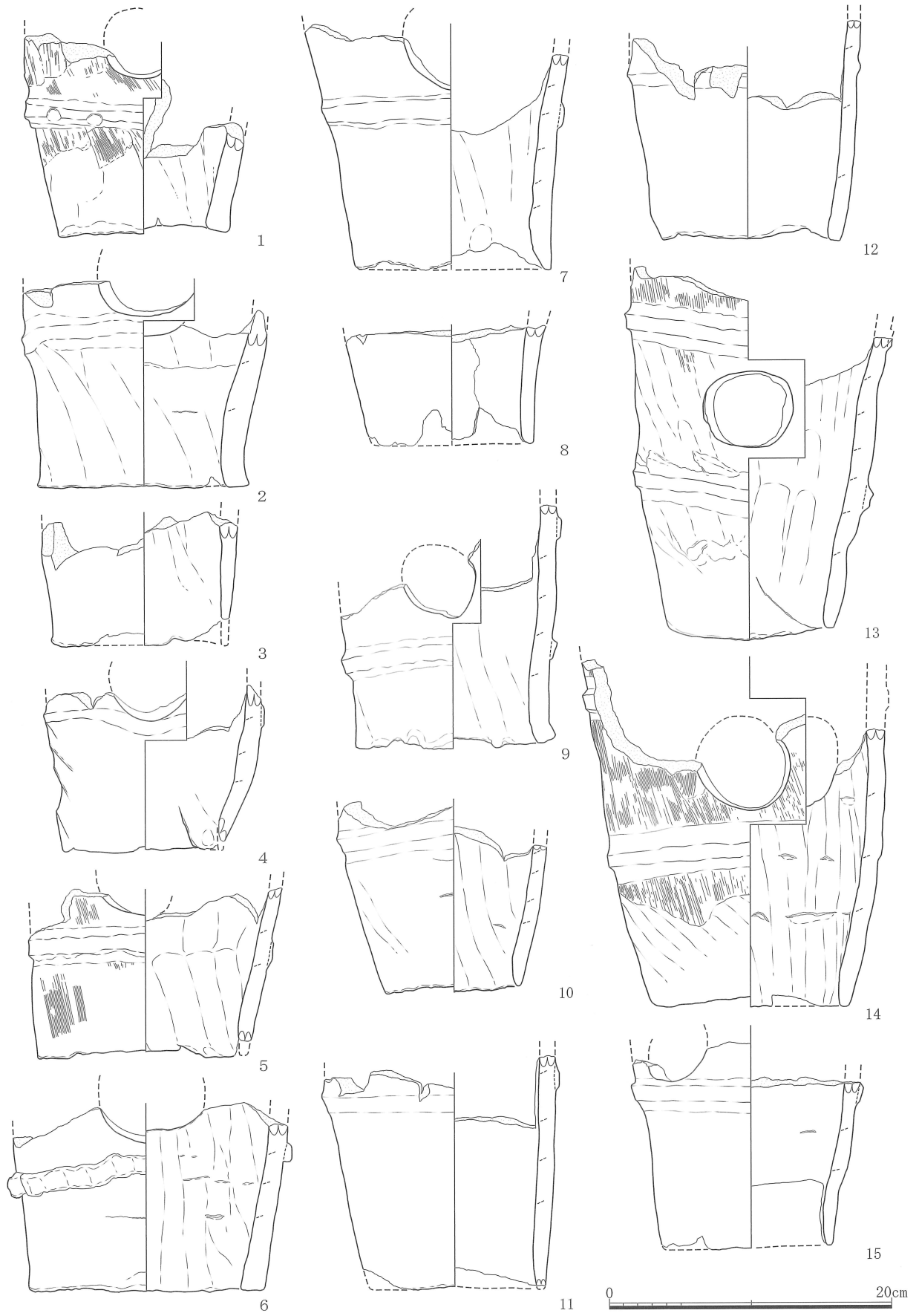
11は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高16.7cm、底部復元径12.3cmで、外面調整と内面調整は磨滅のため不明である。突帯は低く、不明瞭である。色調は褐色で、焼成は不良である。

12は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高17.2cm、底部径12.5cmで、外面調整と内面調整は磨滅のため不明である。突帯は低く、不明瞭である。色調は褐色で、焼成は不良である。

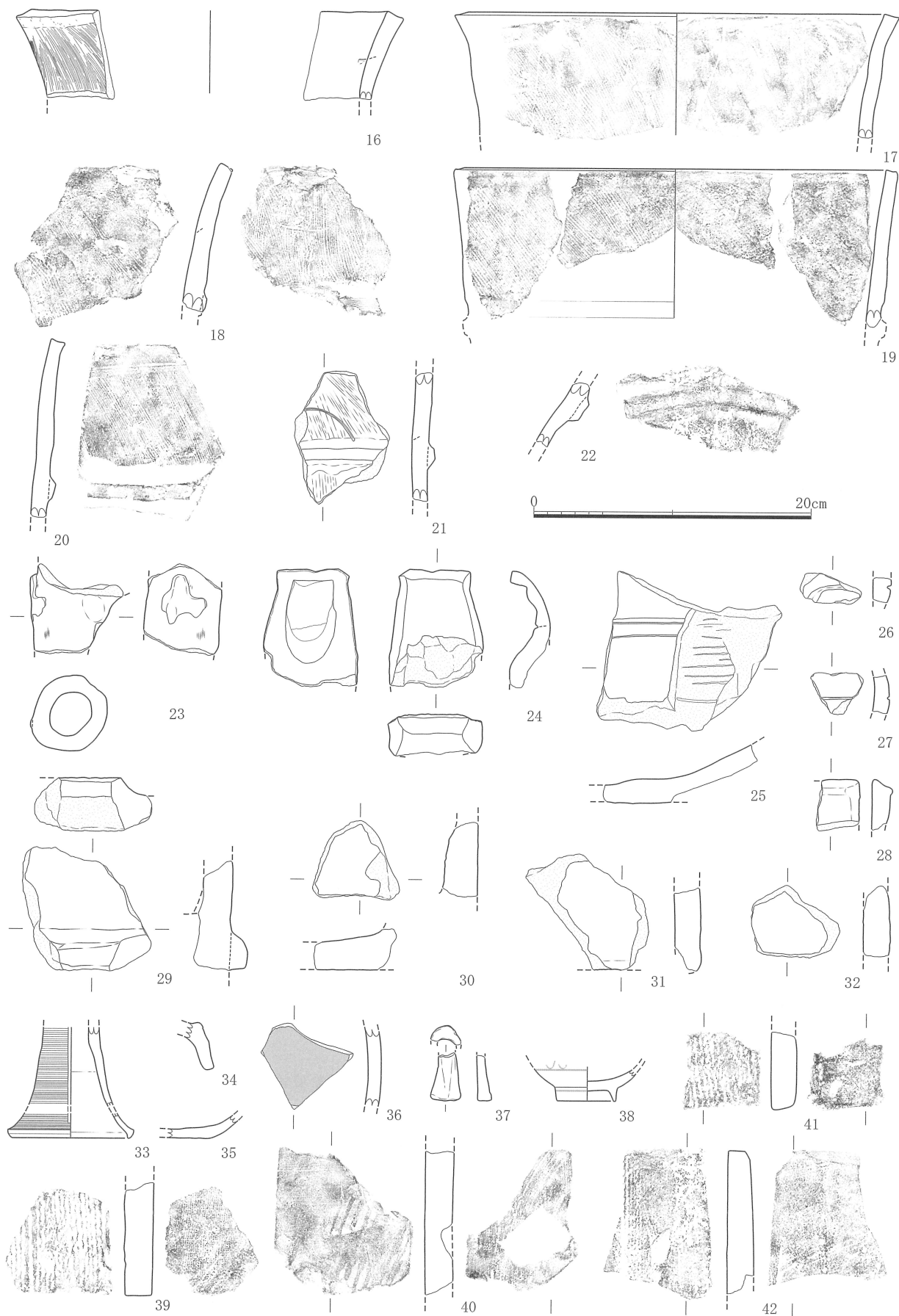
13は、底部より第3段目の途中まで残存し、残存高27.4cm、底部径11.6cmで、外面調整にはタテハケの後ナデ、内面調整にはナデを施す。突帯断面は頂部の窪んだ台形である。第2段目に円形透孔が残り、色調は外面下部が黄褐色、ほかは褐色で、焼成は良好である。13の内部埋土より出土した口縁部17は、同様の胎土・色調・焼成・ハケメから、13と同一個体の可能性がある。口縁部復元径は32cmであるが、小片のた



第39図 河内坂門原陵飛地い号 第4トレンチ平面図・断面図 (1/40)



第40図 河内坂門原陵飛地い号 出土品実測図(1) 円筒埴輪(1/4)



第41図 河内坂門原陵飛地い号 出土品実測図(2) 埴輪・須恵器・土師器・磁器・瓦(1/4)

め信頼度は低い。

14は、底部より第3段目の途中まで残存し、残存高25.3cm、底部径13.5cmで、外面調整にはタテハケの後ナデ、内面調整にはナデを施す。突帯断面は低い台形である。第2段目に円形透孔が残り、色調は外面が黄褐色、ほかは褐色で、焼成は良好である。14の内部埋土より出土した口縁部18は、同様の胎土・色調・焼成・ハケメから、14と同一個体の可能性がある。

15は、底部より第2段目の途中まで残存し、残存高15.2cm、底部径11.7cmで、外面調整と内面調整は不明瞭であるが、ナデを施した可能性がある。突帯断面は低い台形である。色調は褐色で、焼成は不良である。

19は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した残存高11.3cm、口縁部復元径32cmの口縁部片であるが、小片のため復元径の信頼度は低い。外面調整にはタテハケ、内面調整にはナデを施す。色調は黄褐色から灰褐色で、焼成は良好である。

20は、第3トレンチの近世以降盛土より出土した残存高12.8cmの口縁部片である。外面調整にはタテハケ、内面調整にはナデを施す。突帯断面は低い台形である。色調は褐色で、焼成は良好である。

21は、第2トレンチの埴輪列No.9埋土より出土した残存高10.6cmの体部片である。外面調整にはタテハケ、内面調整にはナデを施す。突帯断面は台形である。色調は褐色で、焼成は良好である。9内部より出土したものであるが、胎土・色調・焼成・ハケメ・突帯形状の違いから、9とは別個体と考えられる。

22は、第2トレンチの埴輪列No.14埋土より出土した残存高4.6cmの朝顔形埴輪口縁部付近の破片であるが、端部は欠損している。外面調整にはハケ、内面調整にはナデを施す。突帯断面は台形である。色調は褐色で、焼成は良好である。14内部より出土したものであるが、胎土・ハケメ・突帯形状の違いから、14とは別個体と考えられる。

形象埴輪（第41図23～32、図版24）23は、第2トレンチの埴輪列No.13埋土より出土した残存高6.5cmの人形埴輪腕部片である。外面調整にはハケとナデ、内面調整にはナデを施す。色調は黄褐色から褐色で、焼成は良好である。

24は、第3トレンチの近世以降盛土より出土した残存長8.4cmの馬形埴輪下顎部片である。外面調整と内面調整にはナデを施す。色調は褐色で、焼成は良好である。先端近くの両側面が窪んでいるのは、杏葉部分を接着させる際に押し当てたためと考えられる。

25は、第4トレンチの近世以降盛土より出土した残存高11.5cmの盾形埴輪片である。外面調整と内面調整にはナデを施す。色調は黄褐色から褐色で、焼成は良好である。外面には2条の線刻が残り、破面には粘土を貼り付けやすくするために付けられた刻み目が残る。

26は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した残存長4.3cmの形象埴輪片であるが、小片のため何を象ったものかは不明である。外面には凹線が残る。外面調整と内面調整は磨滅のため不明である。色調は褐色で、焼成は良好である。

27は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した残存長3.7cmの形象埴輪片であるが、小片のため何を象ったものかは不明である。外面には凹線が残る。外面調整と内面調整にはナデを施す。色調は褐色で、焼成は良好である。

28は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した残存長3.7cmの形象埴輪片であるが、小片のため何を象ったものかは不明で、埴輪ではなく土器の可能性もある。外面調整と内面調整にはナデを施す。色調は褐色で、焼成は良好である。

29から32は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した残存長6.3cmから9.3cmの家形埴輪片である。32は磨滅のため調整が不明であるが、他は外面調整と内面調整にナデを施す。それぞれ色調は黄褐色から褐色で、焼成は32がやや不良である以外、良好である。

須恵器（第41図33～36）33は、第2トレンチの近世以降盛土より出土した復元残存高8cm、脚端部復元径8.4cmの高坏脚部片である。2片であるが、胎土・色調・焼成・調整が同様なことに加えて、出土状況からも同一個体と考えられる。小片のため、透孔の幅は不明である。外面調整にはカキメと端部のみ回転ナ

デ、内面調整には下方に回転ナデ、上方にはナデを施す。色調は灰色から暗灰色で、焼成は良好である。脚部のみのため確実ではないが、全面にカキメを施し、やや長脚であることから、田辺昭三の陶邑編年⁽⁸⁾では、TK 10 型式に相当するものと考えられる。

34 は、第 1 トレンチの表土より出土した残存高 3.4 cm の器台脚部片である。外面調整と内面調整には回転ナデを施す。色調は暗赤褐色で、焼成は良好である。

35 は、第 1 トレンチの表土より出土した残存高 1.7 cm の坏身か坏蓋の破片である。外面調整には回転ヘラケズリ、内面調整には回転ナデを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。

36 は、第 1 トレンチの表土より出土した残存長 6.2 cm の器種不明破片である。外面調整は赤色顔料のため不明で、内面調整には回転ナデを施す。色調は外面の赤色顔料が暗赤褐色、内面は灰色で、焼成は良好である。

土製品 (第 41 図 37、図版 24) 37 は、第 1 トレンチの表土より出土した残存長 3.5 cm、残存幅 2.2 cm の破片であるが、何を象ったものかは不明である。外面調整はナデを施し、内面には棒状の物を抜く際に回した痕跡と思しき、長軸に対して直行するスジが残る。色調は褐色で、焼成は良好である。

磁器 (第 41 図 38、図版 24) 38 は、第 2 トレンチの近世以降盛土より出土した残存高 3.0 cm、底部径 4.2 cm の磁器碗底部片である。外面に網代文のような染付が一部残る。内・外面を施釉しているが、高台底部のみ露胎である。色調は釉が透明、呉須が暗灰色、素地が灰色で、焼成は良好である。

瓦 (第 41 図 39～42、図版 24) 39 は、第 1 トレンチの表土より出土した残存長 8.2 cm、残存厚 2.0 cm の平瓦広端部片である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。色調は灰色で、焼成は良好である。

40 は、第 1 トレンチの近世以降盛土より出土した残存長 10.3 cm、残存厚 2.0 cm の平瓦片である。凹面に布目、凸面に斜格子タタキの痕跡が残る。凹面が四角形に抉れているが、意図的なものかは不明である。色調は灰黄褐色から暗灰色で、焼成はやや不良である。

41 は、第 2 トレンチの近世以降盛土より出土した残存長 5.6 cm、残存厚 1.8 cm の平瓦広端部片である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。色調は褐色で、焼成は不良である。

42 は、第 3 トレンチの近世以降盛土より出土した残存長 5.6 cm、残存厚 1.8 cm の平瓦狭端部片である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残り、端部にケズリを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。

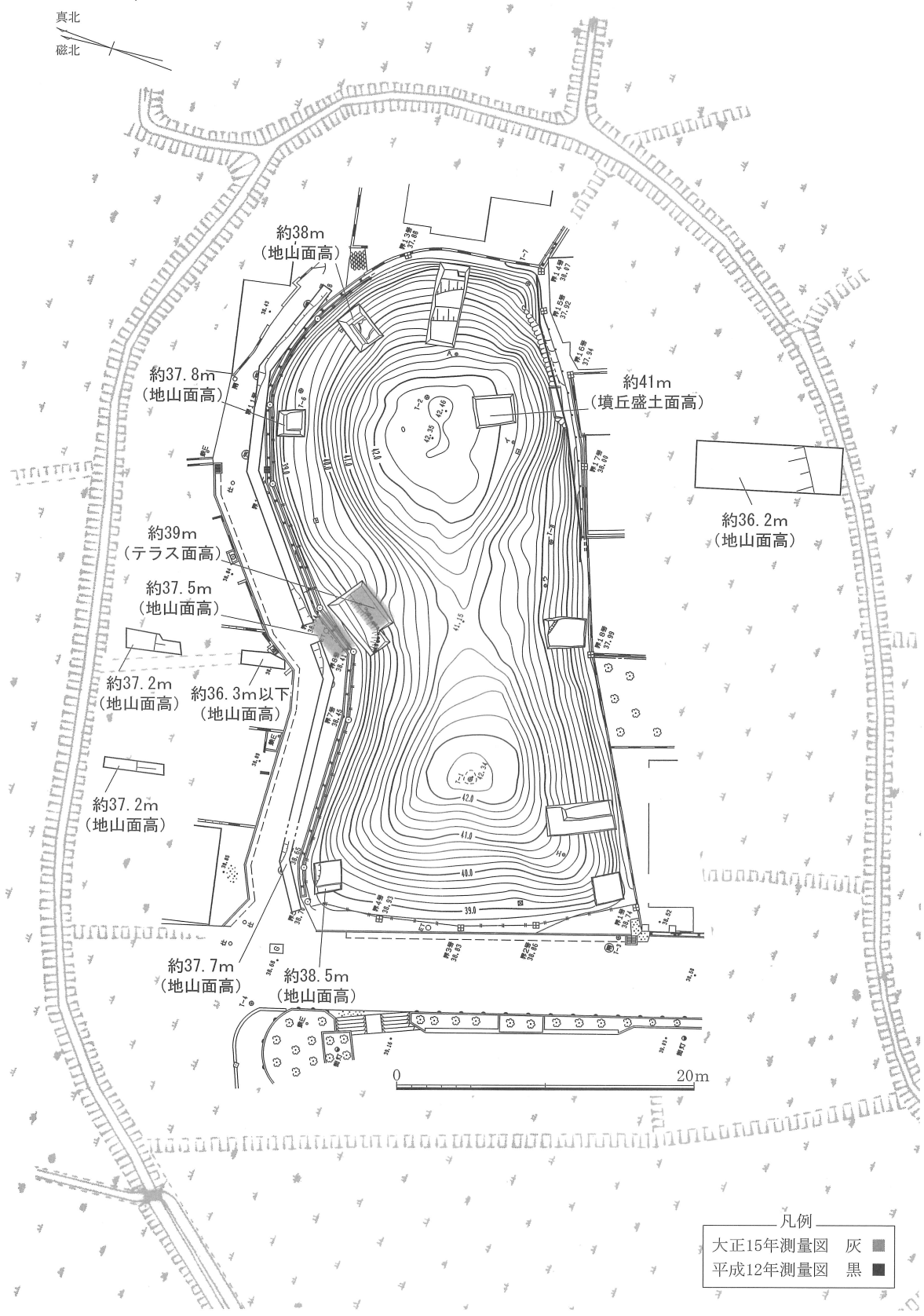
5 調査の所見

段築の復元 今回の調査で得られた情報と過去の調査を参考に、本飛地築造当初の形状、主に墳丘段構成について考える (第 42 図)。第 2 トレンチで検出された埴輪列によって、本飛地は標高約 39 m にテラス面があったことが判明した。そのことに、平成 11 年度の調査⁽⁹⁾で、後円部約 41 m において墳丘盛土を確認したことを加味すると、本飛地は本来 2 段以上の段築数と考えられる。

2 段築成案 地山について、第 1 トレンチでは 38.5 m、第 2 トレンチでは 37.6 m、第 3 トレンチでは 37.8 m、第 4 トレンチでは 38 m で検出されたが、このうち第 1、4 トレンチは明らかに墳丘内側に設定したもので、地山が北から南へ高くなっていることも考慮すると、第 2、3 トレンチが同様の高さで地山が平坦になっている事実が重要と考える。つまり、37.6 から 37.8 m に段の裾があり、ここを高さ約 1.2～1.4 m の最下段の裾と考え、この上に 2 m 以上の段が載ると考えた場合、本飛地の墳丘は大部分が盛土による 2 段築成と復元可能である。この復元の場合、第 2 トレンチで検出した埴輪列は、墳丘第 1 段目の埴輪列ということになる。

3 段築成案 羽曳野市教育委員会による平成 9 年度調査⁽¹⁰⁾では、本調査の第 2 トレンチ北側において、約 37.5 m⁽¹¹⁾の高さで地山を検出していることから、地山は本調査の第 2、3 トレンチから境界外まで多少の傾斜はあるものの、おおよそ平坦になっていることがわかる。羽曳野市教育委員会による平成 10 年度調査⁽¹²⁾でも、本調査の第 1 トレンチ北側において、約 37.7 m⁽¹³⁾の高さで地山を検出していることから、第 2、3 トレンチ周辺の地山平坦面は、前方部北西側まで続いている可能性がある。

また、羽曳野市教育委員会による平成 9、10 年度調査で地山平坦面から北側への落ち込みが確認されたこと、羽曳野市教育委員会による平成 5 年度調査⁽¹⁴⁾で墳丘北側周濠底の地山面が約 36.3 m⁽¹⁵⁾より深く、羽曳



第42図 河内坂門原陵飛地い号 各所標高図 (1/400)

野市教育委員会による平成12年度調査⁽¹⁶⁾で墳丘南側周濠底の地山面が約36.2m⁽¹⁷⁾と確認されたことから、第2、3トレンチ周辺で確認された地山平坦面より周濠底までは約1.4から1.6mの比高差があることがわかった。

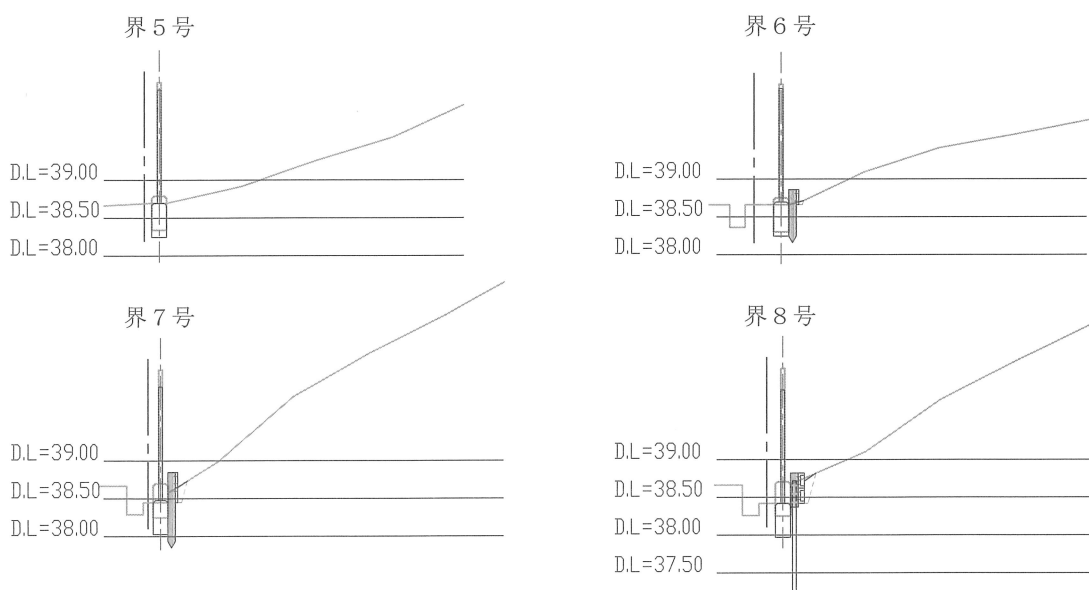
この比高差より、地山を整形して墳丘第1段目を造ったと考えた場合、墳丘第1段目は地山で約1.4から1.6m、墳丘第2段目は大部分が盛土で約1.2から1.4m、墳丘第3段目は盛土で2m以上の高さというように、最上段が高い3段築成の形状を復元可能である。ただし、第1段目が約1.4から1.6mという復元値は、第1段目テラスの高さから周濠底の地山面の高さを単純に引いたものなので、濠底より墳丘側へ上がる地山の緩やかな傾斜を考慮すると、1.4mよりは若干低くなる可能性がある。この復元案の場合、第2トレンチで検出した埴輪列は、墳丘第2段目の埴輪列ということになる。

まとめ

調査成果 今回の調査では、平成11、12年度におこなった墳丘南側の調査で得られた所見と同様、墳丘北側も大きく削平を受けていること、墳丘盛土上に後世の盛土が厚くなされていること、本飛地の墳丘裾は境界外にあるものと考えられることがわかった。新たに得られた知見としては、各トレンチで地山を検出し、墳丘築造にあたって地形をある程度利用したこと、近世以降に盛土がされた際に墳丘はかなり荒廃しており、埴輪列がほぼ剥き出しの状態であったこと、墳丘第1段目もしくは第2段目の埴輪列を検出し、築造当初の墳丘が2段築成以上で、3段築成の可能性もあると判明したことを挙げるができる。

工法 事前調査の結果、前方部北側では宮内庁の境界近くに埴輪列が残存している可能性があることが判明した。そのことをふまえ、界5号より界7号までの間については、地中深くまで金属の芯を打つ擬木柵ではなく、樹脂製の杭等で地中への影響を最小限にするよう配慮した(第43図)。ただし、界5号より界7号の区間については、比較的浅い箇所でも埴輪列が出土する可能性があるため、工事の際には立会調査を実施する予定である。

(横田)



第43図 河内坂門原陵飛地い号 工法断面模式図 (1/100)

註

- (1) 吉澤則男「Ⅱ 小白髪山古墳」『古市遺跡群』X XⅢ、羽曳野市教育委員会、2002年。
- (2) 徳田誠志「清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号境界線保護工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。
- (3) 徳田誠志「清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号境界線保護工事箇所 of 立会調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。
- (4) 吉澤則男「小白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書』平成5年度、羽曳野市教育委員会、2003年。
- (5) 吉澤則男「小白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書』平成9年度、羽曳野市教育委員会、2001a年。
- (6) 吉澤則男「小白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書』平成10年度、羽曳野市教育委員会、2001b年。
- (7) 註(1)に同じ。
- (8) 田辺昭三『須恵器大成』、角川書店、1981。
- (9) 註(2)に同じ。
- (10) 註(5)に同じ。
- (11) これは付近の地表面高38.8mから断面図における地表から地山までの深さ約1.3mを引いて横田が算出した数値で、正確なものではない。
- (12) 註(6)に同じ。
- (13) これは付近の地表面高38.7mから断面図における地表から地山までの深さ約1mを引いて横田が算出した数値で、正確なものではない。
- (14) 註(4)に同じ。
- (15) これは地表から約2.3mを掘削しても地山に到達しなかったという報告書の記述と付近の地表面高38.6mという情報を元に横田が算出した数値で、正確なものではない。
- (16) 註(1)に同じ。
- (17) これは付近の地表面高38.3mから断面図における地表から濠底までの深さ約2.1mを引いて横田が算出した数値で、正確なものではない。



1 墳丘くびれ部より前方部北側（東から、奥に清寧天皇陵）



2 墳丘くびれ部より後円部北側（西から）



1 第1トレンチ 全景（北から）



2 第1トレンチ 西壁（東から）



1 第2トレンチ 全景（北から）



2 第2トレンチ 全景（東から）



3 第2トレンチ 円筒埴輪列（東から）



1 第2トレンチ 東壁（西から）



2 第2トレンチ 南壁（北から）



3 第2トレンチ 西壁（東から）



4 第2トレンチ 円筒埴輪列（北東から）



5 第2トレンチ 円筒埴輪列（南東から）



6 第2トレンチ 墳丘盛土断割（東から）



7 第2トレンチ 北壁（南から）



8 第2トレンチ 円筒埴輪取上後（北から）



1 第3トレンチ 全景（北から）



2 第3トレンチ 西壁（東から）



1 第4トレンチ 全景（北から）



2 第4トレンチ 西壁（東から）



1 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 1



2 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 2



3 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 3



4 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 4



5 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 5



6 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 6



7 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 7



8 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 8



1 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 9



2 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 10



3 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 11



4 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 12



5 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 13



6 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 14



7 第2トレンチ 円筒埴輪 No. 15



8 円筒埴輪・朝顔形埴輪



1 形象埴輪



2 須恵器・土製品・磁器・瓦